

論文審査の要旨及び担当者

論文題名

田中王堂の文明論とその時代

論文審査の要旨

田中王堂は、いまや忘れられた哲学者と言ってよいかもしれない。また、先行研究においては、田中がアメリカ留学中、シカゴ大学でジョン・デューイの教えを受けたことから、単純にプラグマティズムの思想家であると受け取られ、それも第一次世界大戦後のデモクラシーや社会主義の隆盛に対応できない人物であるとして済まされてきた。しかしながら、同時代、すなわち明治末年から大正期における文壇や思想界において、大きな影響力を持った人物であった。また、本学位請求論文によると、明らかにプラグマティストではない側面を持っていた。

本学位請求論文は、上記の先行研究の状況に対して、「文明論」の観点から田中の思想を通時的に分析することで、先行研究の見方をひっくり返そうとするものである。ちなみに、なぜ「文明論」の観点からと言うと、日露戦後ないし第一次世界大戦にかけて盛んに行われた文明論において、田中の議論はきわめてユニークなものであった。よって、「文明論」という軸から田中の思想を見ることで、新たな視角が立ち上がってくることを意図している。以下、各章の内容を要約する。

本論文は、王堂田中喜一を時代の中に位置づけ、彼の文明論の検討を通して、日露戦後から大正期までの思想状況を考察するものである。序章によると、彼の思想は従来、プラグマティズムとして単純化される傾向にあった。それを、本論文はプラグマティズムという枠組みを取り払って、田中の哲学思想の実体解明を目指す。また、田中がどのようにヨーロッパ近代を捉え、思索を積み重ねていったのかを明らかにすることも課題とする。

第1章では、自然主義文学とその反動から生じた儒教再興の議論を文明史的に解釈した田中の言説を検討対象とする。田中はルネサンス以降の「近世社会」の特徴が日本で理解されていないことを説いていたが、その際、たとえば生田長江批判にみられるように、現在の特徴が現れる起点を、田中はフランス革命後の19世紀以降としていた。

一方、自然主義文学の反動として1908年に生じた儒教再興の議論において、田中は明白な批判を展開した。儒教には時代に制約されない普遍的な教訓があることを認めつつ、それは別の道徳体系でも代替可能であり、かつ現在の社会に適さないと批判した。

さらに田中は、大局的な観点から文明史を提示することで、儒教再興の議論を批判する。田中は、情欲と理想の調和の観点から西欧の歴史を、「クラシツク」の時代・「ローマンチツク」の時代・「シンボリツク」の時代に分けた。そのうえで田中は「実利の方面」と「審美の方面」の両方の調和が取れている時代はフランス革命後の「象徴主義」の時代だとして、それを日本の目標とした。

第2章では、田中王堂が自覚した思想の変化を、自然主義文学論争との対応関係の中から明らかにする。田中は自然主義文学者の現実の捉え方が、1つは理想との関係、もう1つは運動としての側面において問題だとした。しかし、田中は岩野泡鳴論への反応に見られるように、情的要素がないがしろにされているとか、田中の理論が抽象的で実際的な問題を解決できないとして、批判された。

よって田中は、もともとは変化を阻害することで「象徴主義」の弊害をもたらす要因としていた情的要素を、逆に慣習に変化を生じさせることが可能なものとして扱うようになった。そして、情的要素を含む「ロオマンズ」をもって生活を指導する原理として「**Romantic Utilitarianism**」を主張した『吾が非哲学』（1913年12月）の出版によって、理論に偏りがちという批判を回避できた。ただし、同時代的には変化したとはみなされなかった。

田中はさらに、それまで未定としていた「実利」と「ロオマンズ」の比重について確定することで、より深化した「ロオマンチツクな功利主義」を唱えた。これは、満足を得るために必要な労力を効率的に選択することを前提に、「思想上の冒険」を行うことで新しい環境に対応する理論的態度をさす。そして田中は、プラグマティズムにはロオマンズに当たる主観的な情的要素が不足していたとして、その克服を試みようとしたのである。

第3章は、田中が大正改元期にヨーロッパ文明の独自化・日本化を実現するために、自らの福沢論吉論を通して「国民性」の改善・活用を求めていったことを明らかにする。田中は、第一次世界大戦が勃発して「思想の独立」に関する論争が巻き起こったなかで、福沢が日本の主権上の独立を達成するために、武力ではなくヨーロッパ文明の受容を通して国民生活の内的な向上をはかるという問題意識を持つ点で「独創家」とであると評価した。

田中はまた、海外思想の無批判の受容に対する解決の糸口として、大正改元直後の「国民性」を意識させた維新言説に注目した。田中は、浮田和民ら同時代の論者と同様、明治時代のようにヨーロッパ文明を物質的に扱うのではなく、大正時代では精神的に運用することを求めた。

田中は、福沢論吉が個人主義・実験主義を適切に理解していたとして、「近世文明」の合理的な運用が可能な資格を有していたと論じた。そして田中は福沢を継承する意味で、「専制主義」のもとにある「国民性」を改善するために個人主義や、「共同生活」における欲望の選択過程である「代償」の理解を求めた。一方、「国民性」の長所として「労力節約の努力」を見いだした。すなわち田中は、福沢が言及した課題を「功利」的な発想で解決しようとした。

第4章では、第一次世界大戦後に盛んになった近代・ヨーロッパ文明批判に対して、擁護の立場に回りつつも、問題点の考察にも及んだ田中の言説を検討する。熱狂を引き起こしたタゴールの来日（1916年5-9月）に際し田中は、タゴールが指摘するように、「外的、物質的なる西洋文明」と「内的、心霊的なる東洋文明」とは対立的関係にはなく、また前者に比して後者を優位に置くことはできないと批判した。

「近世文明」の弊害が第一次世界大戦を生み、よって「新文明の創造」を建設しなければならないという論調に対し、田中は第一次大戦の原因を、調和が保たれていた智慧と知識が分裂した「中世文明」の再燃に求めた。さらに、19世紀以降もフランス革命のスローガンを継承する生活方針を立てることが可能という意味で、「近世文明」の志向は失われていないとする。

このように田中はもともと科学を擁護していたが、「近世文明」への考察を深めるうちにベーコンといった「近世文明」の初期に批判が及ぶようになった。すなわち、知識が改良や工夫を重ねることによって欲望を満足させる方便は発達するが、その知識が当初から持つ目的とはますます離れる。このような知識の智慧との分離が「近世文明」の欠陥であると、内在的批判を行うようになった。ただし、依然として「近世文明」そのものは否定しない。

第5章は、田中が個人を共同体に統合するために用いた論理である「哲人主義」を検討する。田中のいう「哲人」は、自己がなすべきこと、なせることを自覚した上で極端をさけた欲望選択ができる人物をさした。よって、誰もが哲人の潜在性を有するが、能力の適性が個人によって違うと考えた。

哲人政治をめぐる議論に際して、田中はそもそも代議政治と哲人政治は対立概念ではないとして、哲人政治を専制政治的に解釈する論者に対しては文明史的な観点から、逆に代議政治的に解釈する論者に対しては世論と政策の関係から、それぞれ批判した。

協同主義・社会主義の議論が活発になるなかで、田中は個人主義の理解を徹底（「徹底個人主義」）させることで、求められる協同が達成されると主張した。そして、機会の均等を提供することによって、誰もが自身に適した能力を発揮する「哲人主義」の理想が実現されると考えた。

第6章では、第一次世界大戦後における近代批判の中で、田中が象徴主義論の主張を通して、文明が有する本来の機能の回復を求めたことを明らかにする。田中は、西田幾多郎が新カント学派と同様の問題点に行き着いたことから、海外思想の祖述にすぎないと批判した。

田中にとって象徴概念には、「勢力の節約」といった無駄を避ける意味での合理性が含まれていた。この合理的・効率的な象徴解釈は、理想の生活様式に適合するものであった。

田中は、日本の過去の「国民性」が不完全ながらも「象徴主義」を達成できたとし、その上で「近世文明」と「象徴主義」における志向の「類似性と親密性」に言及した。また、「近世文明」の運用に関しては欧米も日本も同じ状況にあり、欧米に対しては偶然成立した近世文明の本質を理解することで、日本に対しては過去の文化を研究することで、「近世文明」の志向を理解して、その次にある「象徴主義」へ移行する必要を求めた。

終章では、本論文の成果をまとめるとともに、残された課題をも提示している。

先行研究のように田中王堂はプラグマティストであると簡単に済ませるのではなく、実際に田中の思想に向き合った場合、田中の思想には一筋縄では把握できない難解さがある。田中の思想が難解である理由の一つには、田中が「近世文明」はもとより、「功利主義」なり「代償」なり「哲人政治」なりといった用語や概念に、独特な意味内容を持たせることが挙げられるであろう。すなわち、限られた文献を通り一遍読んだだけでは、田中の思想を読み間違えてしま

うのである。

本学位請求論文は、『田中王堂著作集』全6巻は言うまでもなく、雑誌の雑報欄や新聞記事など、田中の言説や田中が参戦した論争に関する史料を悉皆拾い上げ、それらを時代順に並べ、かつ当時の論争や思想状況の中に位置づけつつ分析することによって、田中の思想構造と、時代における変化、さらにはそれでも変わらない一貫性について、たんねんに分析している。よって、分析の結果得られた田中の思想像も、きわめて説得的なものとなっている。

審査においては上記の特長を認めただけで、先ず、大きくは本研究の射程について問題となった。先行研究がほとんどない分野を研究することは、即研究の意義・重要性を担保するものではないからである。また、本研究をたとえば大正期知識人・思想史研究のなかに位置づけたとき先行研究の見方をどのように変えることができるか、もっと明確に打ち出すべきではないかという意見も出された。これらの点の指摘は、本研究の意義を否定するものというよりは、序章や終章における本研究の位置づけに関する具体的な改善のための指摘であった。

次に、田中の思想における変化と一貫性との関係についても問われた。すなわち、田中の思想では本学位請求論文が強調するような変化の側面よりも、一貫性の方がより強いのではないかという指摘があった。この指摘に対する学位請求者の応答は、一貫性を浮かびあがらせるためにも逆に変化について精緻に分析したというものであり、納得のいくものであった。

さらに細かくは、田中のそれぞれの時代における思想の特徴に関する分析の当否、論文全体の構成や結論などにいたるまで、活発な質疑応答がなされた。そして、これら細かい点に対する学位申請者の回答はいずれも的確なものであり、論文審査担当者を納得させるものであった。

以上見てきたように、山田大生氏の学位請求論文は序章や終章における本研究の位置づけに関して改善の余地はあるものの、従来しっかりとした研究のなかった対象を本格的に分析したものとして十分価値があり、博士（史学）の学位を授与するのにふさわしい学術的価値があると、論文審査担当者3名は全員一致で判断した。

論文審査主査	千葉 功	教授
	佐藤 雄介	教授
	河野 有理	特別非常勤講師
	(法政大学 法学部教授)	